

金子 三次郎

1. 沖見初炭鉱のこと

帝国炭業会社はその全株を鈴木商店が所有してをつて全く鈴木単独の会社であつたが、この沖見初炭鉱は一寸変つた資本構成で発足した山口県宇部市の東部海底の有望石炭鉱区約参百万坪を所有してをつた全地方の有志が鉱区を現物出資として提供し鈴木商店に現金出資を希望して会社の設立を行つたものである従つて資本金のうち二三割が外部資本が混じつてをつて、地元から重役として藤井保氏・宇野潔氏・三隅珍太郎氏の諸氏が参加選任されてをつた宇部という所は元来宇部地方財閥でかたまつてゐて外部から宇部地方へ来て事業を行うごとき事は、今迄珍らしいことゝせられていた会社が成立して其の開業式にはわざわざ神戸本店から鈴木岩治郎氏が来場されて地方有志及び会社の全社員を前に眞々と立派な挨拶をなされた事を今だに記憶してをる。宇部地方の炭田は九州地方のそれとは全く違つてゐてこゝでは海岸から海底を沖に向つて石炭が存布してゐるので、主として海底採掘を行うのである。従つて時々海底が陥落して坑内に海水が流れ込み大惨事をひき起す事もあるがこんな事は常に起ることでもなくそれよりも炭田の位置が海岸であるから出炭後は直ちに坑口から船積が出来る上に、阪神間迄の機帆船の運賃が安い為に費用が節約出来る其上炭層は傾斜がゆるく（約二度位）採掘が容易であることなどから此地方の宇部興産系の各炭鉱は非常に収益が高く儲けが多かつた宇部興産の今日ある事は、沖の山炭鉱の成功がその基礎となつてゐる。さて沖見初炭鉱の着手は大正五年頃であつた、資本金は始め二百五拾万円で発足し、のちに五百万円に増資した前途を囑望されて発足したのであるが、

主要坑道を海底に添つて掘進しつゝあつた処不幸にも途中に於て広大な蛇紋岩の断層に突き当つた、此断層が相当巨離の長いものだつたのでこれを突破して反対側の石炭層に達する迄に一カ年以上を要した鉱業所の役員始め一同は日夜努力したが中々貫通しなかつたこの為で大正七八年の石炭の好景気のピークの時にも、石炭が出ずに岩石のみを掘進せねばならなかつた事は誠に不運の極みだつた若しこの断層がなかつたら、此二年内でそれ迄の全投資額を儲ける事が出来たであろう。

炭鉱は岩石を掘つておる時でも此炭鉱の前途を樂觀してか株式の市価は百円株が宇部地方で貳百円で売買されてをつた、いかに人気があつたか想像出来る。

此断層突破で資金に不足が起り資本金を五百万円に増資した此前後、実地視察の為神戸から金子直吉様が来坑されたその時、平服のまゝ入坑せられたので一同が恐縮した一幕もあつた、此硬い岩石も遂に突破して石炭層に着炭し毎月一万五千屯位迄出炭するようになったが、其時は又々運わるく大正九年の休戦となり、反動的大不況に見舞われて毎月赤字経営が続くことになつたこの為遂に全重役が不成績の責任を負つて退任することになつたのである。神戸本店の意向により鈴木岩治郎氏が社長に就任され金子三次郎が専務に選任された。これが大正十四年頃であつた岩治郎様が社長として就任された会社はまことに珍らしい其後大整理と合理化を施行し昭和貳年迄は黒字経営を行い得たが、鈴木商店の整理で台銀に引上げられた。鈴木商店整理の際沖見初炭鉱は台湾銀行から相当の借入金があつたので、此整理の為に台銀に於て沖見初を大倉組へ貳百五十拾万円で売却した。大倉組は其後資金を参百万円位追加投入して貳カ年経営したが、成績予期の如く良好にあがらぬ為に遂に、宇部興産の沖の山へ売却した現今では沖の山が採掘してをる。

沖見初炭鉾株式会社の内容

- 一、 本社所在地 山口県宇部市岬
- 一、 鉾 業 所 全 全鉾区参百万坪
- 一、 資 本 金 五百万円
- 一、 社 長 初代 西岡貞太郎氏
 二代 鈴木岩治郎氏
- 一、 出 炭 最盛期毎月約貳万吨
- 一、 販 路 帝人初め各工場 阪神地方の家庭用炭